

【最終講義】

私の『共産党宣言』研究の経緯と課題¹

橋本直樹

はじめに

ただ今、北崎法経社会学科長からご紹介がありましたように、私の研究対象はもっぱらカール・マルクスだったわけですが、対象とする著作が、主に私の研究歴の時期によって3つの領域に分かれます。

第一は、いわゆる初期マルクス、1840年代の『共産党宣言』に至る諸著作で、特に《パリ手稿》、その中に疎外論で著名な『経済学・哲学手稿』も入っております。第二が、1848年の二月・三月革命敗退後、マルクスがロンドンに亡命した直後1849/50年の諸著作およびノート類です。10日ほど前に出版されました『1850年のマルクスによる経済学研究の再出発』²で扱っているものです。第三が、『共産党宣言』の初版の成立史・出版史およびその普及史関係の諸著作で、わが国での受容史関係文献を除けば、大体、20世紀最初の年1900年のロシア語版辺りまでのものです。

で、当初は、この最終講義では、実はこの3つの領域でそれぞれ異なった別種の論文作成方法を採ったものですから、“私の論文技法”といったタイトルで、それぞれの技法についてお話しすると、学生の皆さんが「特殊研究」を作成する際のノウハウの一つをお伝えすることになって良いのかもしれないと考えておりました。しかし、これですと、かなり硬い事柄の三題話めきます。落語のような軟らかいものなら良いのですが、かなり聞き辛い内容になりそうでした。ですので、この講義「市民社会思想史Ⅱ」の今年度のテーマは『宣言』の受容史でしたから、やはり『宣言』についての内容が良からうと判断いたしまして、私がなぜまたどのようにして『宣言』を研究するようになってしまったのか、その経緯をお話しすることにいたしました。まあ定年退職直前の年寄りの昔話になり、お若い方には少々お気の毒ですが、お聴きいただければということです。

というのも、2013年に『資本論』と『共産党宣言』がユネスコ（UNESCO）の世界記憶遺産に登録されたということがございます。皆さんもよくご存知のことと思います。もう少し正確に申しますと、2013年6月21日にユネスコは、アムステルダム为社会史国際研究所が所蔵する『資本論』第1巻初版のマルクス自用本と、やはり同研究所が所蔵する『共産党宣言』の原稿で唯一残された1

¹ 本稿は、2018年1月30日〔火曜日〕4時限に法文学部1号館2階201講義室において、鹿児島大学法文学部2017年度後期開講科目「市民社会思想史Ⅱ」の最後の回（第15回）を利用して行った「最終講義」の手控えに多少の補訂を加えたものです。

² 橋本直樹『1850年のマルクスによる経済学研究の再出発』八朔社、2018年。本書には、後藤康夫氏による書評を頂戴しています（『経済』第279号、新日本出版社、2018年12月、116/117ページ）。

ページ（1葉）を「世界の記憶」リストに登録したのです。『宣言』のこの手稿は、最初と言いますか上部余白の2〔～3〕行がマルクス夫人のイエニーの筆跡で、その下の本文がマルクスの筆跡で書かれており、最下行に後に整理のため、「カール・マルクスの手稿：共産党宣言の最初の草案」と書き込みがなされているものです。「草案」という言葉からもすぐお分かりのように、現在の『宣言』の直接の原稿——ロンドンの共産主義者同盟中央指導部へ送られた入稿原稿——ではありません。ユネスコの世界記憶遺産に登録されたということは、『資本論』ともども『共産党宣言』も、人類全体の共通の文化遺産として認定されたということになります。また、今世紀に入る年は1000年から2000年までのミレニアム（千年紀）の切り替わる時期でもありましたが、イギリスのBBCがこのミレニアムで最も影響力の大きかった人物のアンケートを取ったところダントツでマルクスが第1位を占めたのはご記憶に新しいところでしょう。

こうして、今では人類の共通の文化遺産となった『資本論』と『共産党宣言』ですが、その各国への普及と受容には大きな違いがありました。『資本論』は学術書として各国のアカデミズムの世界に受容されていきますが、一方、『宣言』は宣伝・扇動のための政治文書として、警察・政府当局に禁止・抑圧される対象となります。今ちょうど山本おさむさんの、戦後アメリカのマッカーシズムを取り上げた『赤狩り』というマンガ³がヒットしているようですが、これを日本の『宣言』について見ますと、拙著『『共産党宣言』普及史序説』⁴の第14章のまえがきで記したような状況でした。こうです。

「日本における『共産党宣言』の学術的研究は極めて遅れている。日本が第二次世界大戦に敗北する以前は、治安維持法制天皇制軍国主義政府によって『共産党宣言』の邦訳の出版は禁圧されていた。また、その所持は特別高等警察によって逮捕・虐待される要因となった。戦後においてもいち早く形成された「冷戦」構造のなかで、『共産党宣言』の研究はその一方の側を利するものとされた。そのため、極めて少数であったとはいえ、学術的研究を目指す研究でさえも、周囲からさまざまな政治的偏見の目で見られた。

1990年前後の東欧諸国における一連の政治的変動の後、日本ではようやく『共産党宣言』を学術的に検討する環境が整えられた。とはいえ、このような環境が持続的なものであるかについて、楽観はできない。」（381ページ）

重ねて申しますと、学術的な『宣言』の研究が日本で可能になったのは1990年代半ばから現在までのこのほんの20数年間だけのことなのです。

こういった事情がありますので、なぜまたどのようにして『宣言』を研究するようになったのか、あるいはなくなってしまったのかは、お話ししておく必要もあろうかと判断した次第です。

³ 山本おさむ『赤狩り 1』小学館、2017年。

⁴ 橋本直樹『『共産党宣言』普及史序説』八潮社、2016年。本書には、赤間道夫氏による書評を頂戴しています（『経済』第258号、新日本出版社、2017年1月、90/91ページ）。

I マルクスの著作を読み始めるきっかけ

先に学科長からのご紹介にもありましたように、私は、福島大学経済学部の「卒業研究」で、『経済学・哲学手稿』を対象に研究を開始しました。いわゆる初期マルクスの研究で、福島大学経済学会の『信陵論叢』に掲載されました⁵。

労働疎外論が『資本論』に至るマルクスの経済学批判形成史の出発点であるという問題意識から、「ミル評注」など《パリ手稿》を統一的に読んでみようということでした。福島大学経済学会の『商学論集』掲載稿⁶や青木書店から出ました『講座「資本論」の研究』第1巻所収論文⁷がそういった研究にあたります。

福島大学では当時2年生の配当科目で「前期演習（プロ・ゼミ）」というのがありました。この法経社会学科ですと「基礎演習」に当たります。そこではアダム・スミスの『国富論』やマルクスの『資本論』など、もっぱら古典的著作を読むゼミが用意されていました。『国富論』を担当されていたのは田添京二先生でした。中央公論社の『世界の名著』のスミスの巻、今では全訳されて中央公論社の文庫でも出ておりますが、大河内一男先生の監訳ですけれども、実質的な訳者のお一人でありました。『資本論』は前期の第1巻が真木実彦先生、後期の第2・3巻が吉原泰助先生のご担当でした。『国富論』と『資本論』とどちらにするか悩んだのですが、『資本論』に決めまして、1年生の終わった春休みに、信夫寮という学生寮に居りましたから——6畳の二人部屋でしたが、上級生が退寮されて折良く一人でした——、帰省するのを少し遅らせて、自室で第1巻に取り組みました。当時大月書店から出ておりました『マルクス・エンゲルス全集』の第23～25巻（5分冊）が『資本論』（岡崎次郎訳）の部分でして、その普及版が多少簡易な別の装丁で出ていたのを使いました。第1巻は上下2分冊で、その上巻を、機械と大工業までですね、2～3日で読み終え、それまで疑問に思っていた人種差別などの根源が、結局、資本主義社会の生産システムに根差していると、目から鱗が落ちる思いでした。2年生の「前期演習」で全3巻を読了しまして、いよいよ3年生からの「演習（ゼミナール）」に入ることになりました。

ゼミの選択でも、プロゼミで教えていただいた吉原先生のマルクス経済学の原論のゼミに入ろうかとも、また迷いましたが、初期マルクスの研究で名前が知られ始めていた中川弘先生のゼミに入りました。当時の学生は、特に寮の学生は、「農業経済論」をご担当だった星埜惇先生が「講義は

⁵ 橋本直樹「『経済学・哲学（第一・第二）草稿』と「ミル評注」との脈絡について」福島大学経済学会『信陵論叢』第18巻、1976年5月、28～48ページ。本拙稿の研究史における評価を述べた論稿に、山中隆次「『経済学・哲学草稿』と「ミル評注」との関連」服部文男・佐藤金三郎編『資本論体系 第1巻 資本論体系の成立』有斐閣、2000年、375～383ページ〔特に380ページ〕がある。

⁶ 橋本直樹「『経済学批判』の端緒の形成——《パリ草稿》における「私的所有」批判——」福島大学経済学会『商学論集』第48巻第2号、1979年10月、88～168ページ。

⁷ 橋本直樹「経済学の批判と疎外＝物神性論——経済学的諸関係＝諸範疇の転倒（Quid pro quo）構造——」〔編集顧問〕小林 昇・富塚良三・渡辺源次郎、〔編集委員〕相沢与一・市川佳宏・下平尾勲・中川 弘・真木実彦・吉原泰助・米田康彦『講座・資本論の研究』第1巻 中川 弘 編『資本論の形成』青木書店、1981年、第IV章、147～181ページ。

新書2冊を熟読する程度の中味ですかね」とおっしゃっていたのをいいことに、それなら講義に出ると勉強の能率が落ちると意図的に曲解しまして、講義には出ずに、先輩やその先生のゼミの学生から聞いた文献を、その頃の講義はまだ通年で4単位が普通でしたから、夏休みなどを利用して科目ごとに5～6点あらかじめ目を通し、最後の筆記試験だけ受けるというのが普通でした。それで、大体みな80点以上の優を取っていました。ですから、私も、ほとんどの講義は先生のお名前とお顔が一致しないと失礼にあたるということで、第1回目だけは出席して、あとは筆記試験だけ受けに行くという塩梅でした。これは、もちろん専門科目のお話して、一般教養科目、特に出席重視の語学と体育はまた別でしたが。そういう中で、中川先生のご担当であった「社会科学概論」と藤村俊郎先生の「東洋経済史」の2つの講義は大変面白く、半分近く、10回くらいですかね、出席していたんですね。それで中川ゼミナリストンになったわけです。

ゼミが決まって3年生になる前の春休みに、テキストが望月清司氏の『マルクス歴史理論の研究』（岩波書店、1973年）と決まっておりましたから、そこで取り上げられている初期マルクスの諸文献のうち、マルクスの「ヘーゲル法哲学批判」、『独仏年誌』に収録されましたその「序説」、「ユダヤ人問題によせて」、「賃労働と資本」、エンゲルスの「国民経済学批判大綱」や、初期マルクスの到達点と言ってよい『共産党宣言』まで読了して——たいていは大月書店から出ている国民文庫でした——ゼミに入る準備をしました。が、同じ春休みにゼミの通い合宿というのがありまして、泊まり込みではなくて、大学のゼミ室を借りて、ゼミやサブゼミのように文献をみんな読んで議論するだけなのですが、私はちょうど『経済学・哲学草稿』（城塚登・田中吉六訳、岩波文庫）第1手稿の後半「疎外された労働」の報告分担になりました。どこから入った情報かはもう忘れてしまいましたが、第1手稿をマルクスがどのような順序で執筆したのかを推定したニコライ・ラーピンという旧ソ連の研究者の画期的な論文の、細見英氏——当時、関西大学経済学部教授でいらっしやっただかと思えます——による翻訳が岩波書店の月刊誌『思想』に掲載されている⁸ことを知りまして、図書館から該当する号の入った製本されたのを借り出し、当時まだ1枚100円だった出始めのゼロックス・コピーをしたのでしょうか、熱心に読み、それに基づいて、合宿の報告をしました。当時は報告レジュメはガリ版で切っていました。ゼミに入ってその年の後期くらいの頃から青焼きコピーになりました。ガリ版といい、青焼きコピーといい、この2つとも、今の学生さんには何を言っているのか分からないでしょうね。

この時の、草稿や手稿類は執筆順に読むのが、そのテキストの連絡や全体像を掴まえるのに大いに役に立つという印象が、「卒業研究」の執筆時にも生きました。

当時、中川先生が書かれていた論文の中では、2つ、執筆順序の推定をなさっていました⁹。同じ『独仏年誌』に掲載されたマルクスの「ユダヤ人問題によせて」と「ヘーゲル法哲学批判。序説」

⁸ ニコライ・I・ラーピン（細見 英 訳）「マルクス『経済学・哲学草稿』における所得の三源泉の対比的分析」『思想』第561号、岩波書店、1971年3月、98～118ページ。

⁹ 中川 弘「『経済学・哲学草稿』と「ミル評註」——「疎外された労働」論を中心とした一考察——」福島大学経済学会『商学論集』第37巻第2号、1968年10月、1～50ページ。

との前後関係、また『経済学・哲学手稿』第1手稿と「ミル評注」¹⁰との前後関係です。中川先生は、前者（『独仏年誌』所収稿）については、『資本論』の構成との類似を重視して、商品・貨幣の関係を論じる文献（「ユダヤ人問題によせて」）が先で、資本・賃労働関係を論じる文献（「序説」）が後と推定され、後者（《パリ手稿》）では、分析の成熟度などから、その逆（『経済学・哲学手稿』第1手稿→「ミル評注」）であると見ていらっしやいました。それに対して、特に後者についてですが、細見先生は中川先生と逆の推定をしていらしたのです¹¹。で、先のラーピン論文が出まして、実際にアムステルダムの社会史国際研究所に所蔵されている『経済学・哲学手稿』や「ミル評注」のオリジナル手稿が点検・吟味されました結果、ノートへのペンでの書き込みの字の重なり具合やノートの紙質その他、動かしがたい物証によって、中川先生の推定と同じ結論となる執筆順序を推定したのです。そういった経緯があり、細見先生はラーピン論文を翻訳されて、自説を撤回されます。とはいえ、その後、1975年に亡くなられたと伺いました。事故、あるいは以前からご病気などのあったためなのかもしれませんが、私は、こういった諸事情から、なんとはなしに研究は命懸けでやるものなのだという印象を学部生の頃からもつことになりました。

こうした、中川先生やラーピンによる『経済学・哲学手稿』第1手稿から「ミル評注」へというマルクスの執筆順序のかなり確度の高い推定があり、それに基づいて、マルクスの当時の問題意識に応じた《パリ手稿》全体の内在的な読み方が可能となったわけです。さらに立ち入って申しますと、『経済学・哲学手稿』第1手稿前半部はノートを労賃・利潤・地代と3欄に分けて、もっぱら『国富論』からの抜粋がなされております。これが実際は、概略、資本の利潤→労賃→地代といった執筆順序であったとのラーピンの推定も大いに役に立ちました。つまり、『経済学・哲学手稿』第1手稿前半部の「資本の利潤」欄の中間総括にある私的所有（私有財産）の成立の根拠を問う問題設定が、第1手稿後半部の「疎外された労働」部分末の問題設定に発展して引き継がれ、「ミル評注」を媒介して第2手稿末の全体概観に至る、という《パリ手稿》全体の私的所有批判についてのマルクスの問題設定を明確にとらえることが可能となったのでした。この順序で何度も《パリ手稿》を読み直し読み直ししていた「卒業研究」執筆時は、変な言い方になりますが、まるで自分がマルクスになったような高揚した気分だったのを昨日のこのように思い出します。

Ⅱ 『共産党宣言』についての論文を書くようになった経緯

1. フントさんの『『共産党宣言』はいかに成立したか』との関連

2002年7月にフントさんの『『共産党宣言』はいかに成立したか』¹²の翻訳を出しました。これに

¹⁰ 旧『メガ』の邦訳が、杉原四郎・重田晃一訳『マルクス 経済学ノート』未来社、1962年に収録されていました。

¹¹ 細見 英「マルクスとヘーゲル——経済学批判と弁証法——」経済学史学会編『《資本論》の成立』岩波書店、1967年、127～156ページ。

¹² マルティン・フント（橋本直樹訳）『『共産党宣言』はいかに成立したか』八潮社、2002年。本拙訳には杉原四郎先生から書評を頂戴しています（『経済』第86号、新日本出版社、2002年11月、136/137ページ）。

については実は長い経緯があります。

訳者あとがきの最後のところで、どのような経緯で翻訳することになったのかを紹介しています。しかし、これは直接翻訳につながる最終段階の事柄であります。

私は鹿児島大学に1985年4月に赴任します。夏休みには東北大学大学院での指導教官でありました服部文男先生が毎年夏に主催する「東北社会思想史研究会」が仙台で開催されます。参加者全員が報告するハードな2泊3日で、仙台市の施設であった「茂庭荘」で行われるのが常でした。参加者は14～15名で、服部先生を指導教官としていた新旧の大学院生がほとんどでしたが、後にはさらにそのお弟子が参加したりしました。以前、経済情報学科に在職していらした王保林先生も孫弟子になりますので、一夏参加されたことがありました。後で同僚になったのには驚きました。王先生は母校の人民大学に戻られましたが、一時は同じ経済情報学科に服部先生の門下が、後藤先生・渋谷先生・王先生・私と、4人在職していたわけで、このようなことはあまりない大変稀なことだったのではないのでしょうか。

この就職しまして最初の研究会で私は、『共産主義者同盟 文書および資料』第2巻¹³を使って報告しました。しかし、それは酷いもので、これではいかんと、しっかり準備して翌年同じ素材で報告をしました。この時の報告が、ほぼそのまま、一昨年出しました『『共産党宣言』普及史序説』の第8章になっています。私が赴任する前年1984年に、服部先生と黒滝正昭さんが『季刊 科学と思想』第51号にこの史料集の意義について紹介する論文を書かれていました¹⁴。担当は第1巻が黒滝さん、第2巻が服部先生でした。これは、1982年に第2巻が出版され、特にその中で、すでに1970年に出ていた第1巻への訂正などが後注に記載されており、紹介する必要があると服部先生が考えられたためです。これを読みまして、それまで私の研究は《パリ手稿》が中心で、渋谷先生と多少重なり合うところがありましたから、別の領域へ移る必要があると思っていたところ、こうした運動史の面から40年代を見るのも意義があり、私にも何か貢献できるところがあるのではないかと考えたのでした。さらに、在仙中、この史料集の重要性を服部先生から、それまで2度出ていたロシア語の同盟の史料集と比べて、原語で出た意義その他、いろいろと伺っていたことももちろんありました。

この同じ1985年にフントさんのご本の再版が出まして、私も給料がもらえるようになりましたので、極東書店から購入しました。

確かこの夏の研究会の前夜、東北大学経済学部の研究棟3階——院生・助手フロア——の一室で、後に静岡大学人文学部助教授になりました石原博さんもいらしたと記憶しますが、初版とどう違うのかを先生に伺ったのでした。(あるいは、それ以前に、まだ再版の出る前に、先生が

¹³ *Der Bund der Kommunisten. Dokumente und Materialien*, Bd. 2 · 1849-1851, Berlin 1982.

¹⁴ 黒滝正昭・服部文男「『共産主義者同盟 文書および資料』の意義について」『季刊 科学と思想』第51号、新日本出版社、1984年1月、93(473)～110(490)ページ(分担個所のそれぞれは後に、黒滝正昭『私の社会思想史』成文社、2009年、68～80ページおよび服部文男『マルクス主義の発展』青木書店、1985年、205～213ページに収録された)。

1978年に文部省の短期の在外研究からお帰りになって、東ベルリンのマルクス・レーニン主義研究所でフント氏とお会いになったときのことを伺った折のことだったかもしれません。)この本について尋ねたところ、フント氏はすでに「ある日本人にたいして翻訳の承認をあたえた」というのです¹⁵。ところが、再版が出た時点では、それから7年経っていましたが、いまだ邦訳が出ていないのです。私も再版を読んでとても興味深かったものですから、その内容紹介をする必要があると考えたのです。ところが、フントさんはすでにある日本人に翻訳の権利を与えているということですから、邦訳するというわけにもいかないのです。当時、日本にも良知力先生の『マルクスと批判者群像』(平凡社、1972年)¹⁶という優れた著作がありました。フントさんの初版の出る前年の出版です。しかし、このご本は、まず典拠が十分明らかにされていないこと——確かに多くがアルヒーフ類からのマイクロフィルムですから、整理が大変なのはよく分かるのですが、とはいえ、明示がないと追試のしようがないわけです——と、分析視角がマルクスを相対化しようとするあまり、それではマルクスやエンゲルスに即した場合にどのようになるのか、という点が欠けているように思いました。それまでにそのような視角の本があればよかったです、日本にはまだなかったわけです。後から考えれば、フントさんのような本が先に出て、その後に良知先生のご本が出れば分りがよかったですね。

で、私はいろいろ考えました。無い知恵を絞りまして、初版の在庫が極東書店にまだあり、手に入ったものですから、再版と双方を比べてみました。フントさんが再版の前書きで書かれているように、それほどの違いはないのですが、まあ改訂された点は、その間の研究の進展を示しており、それらを外挿してみますと、今後の『宣言』研究の方向性もおのずと示されるというようなものだったのです。それで、私は、改訂されたのはどういう点なのかを紹介するという体裁をとって、内容の要所を全て紹介してしまう書評論文を書くというアイデアを考えついたのです。

1986年から1987年にかけて、ほとんど全訳を作成し——もちろん拙いもので、そのままでは翻訳として出版できるような代物ではありません。まあ手控えの翻訳メモといったところでしょうか——、書評論文の方は1988年1月末に脱稿、3月に『経済学論集』に掲載されました¹⁷。この校正をしていた頃は、4歳だった長男を保育園に市電で送り迎えしていました。帰りの電車の中で校正刷を読んでいると、相手をしてくれないというので、隣に座っている長男がおとなしくせず、思わず頭を殴って大泣きされ、まだダイエーのあった郡元電停で二人降りまして、なんとか泣き止ませて帰宅したことなど、想い返します。これなど今ならドメスティック・バイオレンスということにもなるのでしょうか。この論文が拙著『普及史序説』の第7章の元になっています。

¹⁵ 服部文男「ベルリンの「マルクス＝レーニン主義研究所」を訪れて」『窓』第28号、ナウカ、1979年5月、2～5ページ。「印象に残った研究者はフント氏である。彼の著書『いかにして『宣言』は成立したか』(1973年)が日本語に訳されるはずだと語っていたが、[……]」(4ページ下段)。

¹⁶ その後、平凡社ライブラリー662としてA6の判型で2009年に再刊されています。

¹⁷ 橋本直樹「M. フント『共産党宣言』成立史』(改訂増補再版、1985年)に寄せて」鹿兒島大学法文学部紀要『経済学論集』第28号、1988年3月、23～68ページ。

このような紹介の作業を誰がやるのかという点では、本当はすでに訳書¹⁸も出されていて7～8ヵ国語に通じていた石原さんが適任だったのですが、前年の1987年4月に静岡大学人文学部に経済学史ご担当の助教授として赴任され、講義の準備その他で大変ご多忙でしたので、阿吽の呼吸とでもいいますか、服部門下の編隊飛行と言う人もいるようですが、まあそんな関係で、私が書くことになってしまったのです。ですから、仕上がった初校のコピーを静岡の石原さんにお送りし、一読していただき、当時はまだ高かった長距離電話で1時間近く、訳のおかしな所、論立ての悪い所など、いろいろアドバイスを受けることができたのは大変有り難いものでした。そんな雑用が、翌年の白血病の発症にいくらかでも関係しやしなかったらどうかと、責任を感じてもいるのです¹⁹。

こうした経緯と言いますか、下準備がすでにあつたものですから、1998年秋にベルリンを訪れ、フントさんにポツダムのサン・スーシー宮殿を案内していただいた折に、改めて翻訳のことを伺い、邦訳の許可を得ることができたわけです。詳しいお話は訳者あとがきにある通りです。

「本邦訳出版に至る経緯について簡単に述べておきたい。訳者は、奇しくも『共産党宣言』刊行150周年に、著者と再会する機会に恵まれた。『ゴータ綱領批判／エルフルト綱領批判』の新訳に関連する調査でベルリン・ブランデンブルク科学アカデミーを訪れた後藤 洋氏（鹿児島大学教授）に訳者も同行させて頂いた折にである。著者は、アカデミーで1850年前後の同盟の活動や『宣言』初版にかんする訳者の質問に応じてくれた翌々日、わずか二週間前に居を移したばかりというポツダムにわれわれ二人を迎えてくれた。サン・スーシー宮殿のある公園の「竜の家」で少し遅い昼食をとった際に本書が話題となった。東欧崩壊後、マルクス主義関係書籍の出版事情は日本国内でも厳しくなっているとはいえ、あらためて邦訳を用意することは日本における『宣言』理解にとって有益なので、翻訳出版できればよいが、と尋ねると、快諾の応えが得られたのであった。」(229～230ページ)

それでも、読めるような日本語にするのはやはり大変で——まだそうならないかもしれません——、特に国立大学法人化を前にする局面でしたから、その対応に忙殺されました。留学から戻って、この翻訳に集中しようと思っていたのに、なぜか日本科学者会議の鹿児島支部の事務局長の大役が回ってきました、結局1999年の1年間は何もすることができませんでした。（これについて、詳細は省きますが、旧法学科ご所属だった会員のU先生には一言、恨み言があるのです。）2000年夏頃から実質的な訳文の作成を始めまして、2001年末～2002年前半で校正等が済み、無事出すことができたわけです。

今でも、フントさんが服部先生に応えた「ある日本人にたいして翻訳の承認をあたえた」というのは、どういうことだったのだろうと思うわけです。確かに翻訳を出さないといけない期限はあって、私が申し出た時にはそれがもう切れてしまっていたのか、初版と再版とでは権利関係が違うのか、あ

¹⁸ テート, H. E. (宮田光雄・石原 博 訳)『ハイデルベルクにおけるウェーバーとトレルチ』創文社、1988年。

¹⁹ 「故 石原 博 助教授著作目録・略歴」静岡大学人文学部『法経研究』第39巻第3号（故 石原 博 助教授追悼号）、1990年12月、264/265ページ。

るいは当時の東独のML研ではおそらく種々の制約があったでしょうから、翻訳の求めが出る前にやんわりと体よく断るための口実だったのかなという気もしたりするわけです。これは今も謎です。

2. 『共産党宣言』1872年ドイツ語版研究の経緯

1993年11月に「『共産党宣言』1872年ドイツ語版の刊行経緯」という論文を『経済学論集』第39号に掲載します²⁰。これについては、当時、学科の同僚で、今、九州大学にいらっしゃる石田修先生——日野先生の指導教員でしたか——のお蔭と言ってもいいのかもしれませんが。

未来社という出版社があります。ベストセラーになった丸山真男氏の『現代日本の政治と行動』を出した所です。経済学史で著名な、日本学士院会員であった小林昇先生の著作集や、実質的には服部文男先生がすべて編集したご尊父、服部英太郎先生の著作集も出しています。他にも、福島大学経済学部の山田舜先生や星埜惇先生、相澤興一先生の諸著作、富塚良三先生の『恐慌論研究』、『蓄積論研究』の出版社でもあります。哲学では岩崎胤允先生の一連の著作も出しています。

その未来社からいわゆるリトル・マガジンとして『未来』というのが出ています。1992年2月に出たNo.305に村上隆夫氏の「マルクスは『共産党宣言』を書き遺したのか」という5ページ程の論説——というよりエッセイなんですかね——が載ります。その表題からもおおよそはお分かりになりますように、マルクスは「共産党宣言」を書いたのではなく、本当は「共産主義宣言」という表題にしたかったのだ。つまり、マルクスの本意は、共産主義者は党をつくってはならないということだ。それを明瞭に示すために1872年のドイツ語版では、それまでの『共産党宣言』という表題は止めにして、党をはずした「共産主義宣言」という表題にしたのだ、と言うのです。他にも第1インターナショナルやレーニンの党把握その他について、論拠を示さずに驚くような独自の見解が書かれているのです。

このような論説があるということをお教えくださったのが石田先生でした。ちょうど、今の学科事務室にいたときに、「橋本先生、こんな論文が出てるの、ご存知ですか？ 内容はホントなのかな？」と、『未来』を手にして声を掛けてくださったのです。先に述べましたように、すでにフントさんの著書の書評論文を『経済学論集』に出していましたから、石田先生はそれをご存知で、私が『宣言』に多少は関心があると覚えていてくださったのでしょう。その時点では未読でしたので、石田先生がお持ちだった『未来』をお借りして、該当ページをコピーし、早速読んでみました。

その評定は、すでに拙著第11章と第9章第IV節で論定済みです。当時はそれ程『宣言』の学術的研究といったものはありませんでしたので、多くの方は当否の判断をすることができず、随分多くの人たちに広まり、国内各所で話題にもなったようです。服部門下でも話に上って、流石に皆さん専門家ですから、最初から、論拠を欠いた成立し難いものだという事は分かっていました。で、

²⁰ 橋本直樹「『共産党宣言』1872年ドイツ語版の刊行経緯」鹿児島大学経済学会『経済学論集』第39号、1993年11月、57～76ページ。本拙稿への反響については、『経済学論集』本号に掲載していただいた拙研究ノート「『共産党宣言』の普及史から——短い表題・最初の連載・初版の部数——」稿末の資料1・資料2・資料3をご覧ください。

服部先生が編集されて2ヵ月に一度出していたお弟子のサークル誌『東北社会思想史アルヒーフ』に各自反論や論評を書くことになったのです。私は村上論文のあらゆる論点に対して、反論を書こうとして、おおよその論拠も加え、まだ完成稿には程遠い代物を出したのです。他に論評を寄せたのはなんと服部先生お一人だけで、1872年ドイツ語版について、アンドレアスの見解を紹介しながら、村上説の成立しない所以を述べられたものでした。その後、服部先生から誰かきちんとした反論を書いておいた方がよいだろうというお話しがあり、これも私が貧乏くじを引くような形で、先生からいろいろと資料のコピーを送っていただいたりして書くことになったわけです。拙著第11章の初出論文です。

拙著の第9章の第IV節「『共産党宣言』の二つの表題について」では特にこの短い表題について論じています(251～254ページ)²¹。その要点を掻い摘んでご紹介しますとこうです。

短い表題の『共産主義宣言 (Das Kommunistische Manifest)』はやはり略称と見るのが妥当です。と言いますのも、まず、この短い表題はすでに『宣言』が起草される以前からマルクスではなくてエンゲルスの方が先に使っていました²²。また、『宣言』の公刊後には共産主義者同盟員の間でやり取りされる手紙でいろいろな略称が使われます。とはいえ、この表題が最初に付けられて、それ以後、特にドイツで一般化していくきっかけとなるのは1872年のライプツィヒ大逆罪裁判です。その審理ではほとんどすべての箇所短表題の方が使われました。話すのには略称の方が簡単ですから。そして、この裁判では、検察側からの求めで、大逆罪を立証する証拠書類として『宣言』全文が朗読されます。そのお蔭で、裁判記録『ライプツィヒ大逆罪裁判』のなかに合法的に『宣言』全文を収録して出版することが可能となりました。さらに、『宣言』の部分だけの別刷を作成しまして、社会民主労働党内でのみごく少数頒布する試みもなされました。これが1872年ドイツ語版なんですね。そのためアンドレアスはこの版を正式の版本とは認めがたいと見ているようです。この1872年ドイツ語版以降、特にドイツにおいて、同盟とその後の労働者党との同一視を避けるために、短い表題が用いられていくことになるわけです。とはいえ、内題(ハーフタイトル)は相変わらず当初の長い表題のままですし、エンゲルスがオーソライズした1888年の英語版は当初の長い表題そのままの英訳です。

1872年ドイツ語版についてこうした出版史あるいは普及史を少しでものぞいてみるならば、村上氏のような見方を出すことができないのは、はっきり分かったわけなのです。日本の研究者がこと『宣言』についてはいかにしっかりした学術的研究をしてこなかったのか——あるいはそうしようと考えてもできない客観的条件があったんだということ——がこの時によく分かりました。今、振り返って、村上氏に即して考えてみますと、その書かれた年を見れば、旧ソビエト連邦の崩壊の翌

²¹ 第9章の初出は、次項でご紹介する拙稿「『共産党宣言』普及史研究の諸成果」『経済』第29号、1998年2月号、122～141ページです。本号所収の前記拙研究ノートでは、該当箇所にも多少の補訂を加えたものを掲げておきましたので併せてご参照ください。

²² 「1847年11月23/24日付マルクス宛エンゲルスの手紙」(MEW, Bd. 27, S. 107. 邦訳『全集』第27巻、100/101ページ)。

年で、当時のソ連の体制やスターリン、レーニン、エンゲルスからマルクスを切り離して、その思想を救い出そうとした善意から出ているものともとれるのかなということになりませんか？

3. 『共産党宣言』普及史研究に至る経緯

(1) 雑誌『経済』の『共産党宣言』刊行150年記念号への寄稿

これで『宣言』について、私は2つの論文を書くことになりました。教授ポストがなくて、教授昇格が遅れるなかで、教養部が解体され、そこで浮いた教授ポストでようやく1997年6月に教授にさせていただきました。これは案外重要で、文部省の在外研究員の順番が私に回ってきて、1997年度中には出発しないといけないことになっていました。当時の日本の文系の研究者には課程博士の人はほとんどいませんでした。たいていは退官間際に出身大学に執筆・出版した著書を1～2冊、そのまま博士論文として提出して、博士号をもらうのが、いわば定番でした。今でも文学部はまだそうなっているのかもしれませんが、Dr.の学位がない場合に、外国に行くとなると、肩書としてはやはり教授(Prof.)でないといろいろと具合の悪いことが起こるわけです。戦前の日本ではちょうど逆のようで、旧帝大では若手の助教授がもっぱらヨーロッパに3年位留学、帰国して、著書を1冊出すとまあ教授昇格となっていたようです。

で、1997年の秋でしたか、服部先生から、来年は『宣言』発刊150年に当たるので、雑誌『経済』で特集号を企画している。私も書くので、橋本くんも書かないかというのです。『経済』の編集部の方で人選したところ、私がただ2本しか『宣言』について書いたものがないにもかかわらず、執筆候補者の中に入ってしまったようなのです。本人、びっくりです。それだけ『宣言』の研究は専門家からも忌避されていたんですね。旧東欧諸国の崩壊後の時期は特にそうだったのでしょう。留学は1998年3月12日に鹿児島を出発する予定にしていました。『経済』の掲載号は、『宣言』が1848年2月刊だったのに合わせて、2月号、1ヵ月前の1月上旬には発行されますから、すると締切は1997年の年内一杯ということになります。留学の準備と重なってしまい、どうしようかとも思ったのですが、引き受けて書いてみることにしました。服部先生は成立史の方を書くので、私は出た後の普及史・影響史の担当となりました。毎夏の社会思想史研究会で1986年に『同盟』史料集をもとに1849/50年の活動について報告したことはすでにお話ししました。それに関してさらに調べてみたい事柄もいくつかあったものですから、それを中心的内容にして書くことにしたのです。これが拙著『普及史序説』第9章の初出稿です。

このように『宣言』について3本——3は多数のいわば代名詞です——論文をもつことになり、まるで『宣言』の専門家の一人であるかのように、国内では見られ始めたのでした。

(2) アムステルダム社会史国際研究所での『共産党宣言』関係史料調査

そして、決定的だったのは留学でした。よりによってその年は『経済』でも特集号を組むくらいの『宣言』公刊150年の年回りに当たりました。この年に、まさしくアムステルダムの社会史国際研究所に留学したということが、その後、少なくとも10年間は『宣言』の研究をしようと決意させる

ことになったのです。その辺りの詳細は、鹿児島大学庶務部庶務課編『学報』第448号（1999年3月）4/5ページの拙稿「研究ニュース【文部省在外研究員レポート】社会史国際研究所での『共産党宣言』関係史料調査」に書いている通りです。3枚の添付写真を除いて全文引用しておきます²³。

「■文部省在外研究員レポート

社会史国際研究所での『共産党宣言』関係史料調査

法文学部教授 橋本直樹

文部省の在外研究員として、昨年（1998年）3月12日から10ヶ月間、オランダで過ごしました。滞在先はアムステルダムにある社会史国際研究所です。1935年創立、頭文字を並べたHISG（イー〔・イー〕・エス・ゲー）の名で親しまれ、オランダ王立科学アカデミーに属しています。1980年代に入り、もとの港湾地区であった市東部が商品倉庫群を集合住宅に改築して居住地区へと生まれ変わるなか、収蔵資料で手狭になったために、カカオ豆の保管倉庫を改築し、10年ほど前に引っ越してきたところです。移転後、最初に訪問したのは建築学の研究者グループだったということですから、四季を通じて快適に過ごすことができました（写真1：研究所。背面にあたる海側から）。

HISGは、カール・マルクスとフリードリヒ・エンゲルスの草稿があること、また1975年から刊行されていた新しい『マルクス/エンゲルス全集』の継続が、旧東欧諸国の解体後、座礁しかかるなか、編集方針を脱政党化し編集体制の学術化と国際化をはかって継承した「国際マルクス・エンゲルス財団」が置かれていることで日本では有名です。が、スタッフによれば、2,000件を越える世界的に著名な思想家や研究者、組織・団体の文書集（アーカイヴ、アルヒーフ）を6km以上の厚さで所蔵し、マルクス/エンゲルス遺文庫はその二千分の一にすぎないとのことです（写真2：文書の保管室の一つ。水島多喜男徳島大助教授、ミーケさんと）。そのためでしょうか、昨年12月に来所していたイタリアの現代史研究者はマルクスらの遺文庫があることをまったく知りませんでした。アジアに関係する最近の収集では、天安門事件前後の学生による民主化運動の文書類が関連研究では必見のものとされています。書籍・雑誌・新聞等、印刷物の厚さは計約25km、百数十万点といますから、ちょうど本学図書館所蔵の本すべてが社会経済史・経済思想史・社会運動史関係だけになった状態です。もっとも古いものの一つに複式簿記を説いた16世紀のイタリア語の古版本があり、アメリカから会計史専攻の研究者もたびたび来所するそうです。

今回の滞在は、中欧担当の主任研究員であり、上記財団の事務局長でもあるユルゲン・ローヤン博士にお引き受け頂きました。博士は、国際交流基金の招きで5年前に来日された折、

²³ 大変有難いことに、拙稿中、研究所の紹介部分を、当時エジプト共和国への研究旅行の途次アムステルダムに立ち寄られ、文書保管庫の見学をご一緒した水島多喜男徳島大学教授が、最近のご論考で引用してくださっています。水島多喜男「『関係学会合同企画/21世紀におけるマルクス/『資本論』150年記念シンポジウム』報告」徳島大学総合科学部編『社会科学研究』第31号、2017年12月、73ページ、脚注5。

鹿児島大学経済学会主催の研究会に出席するために来鹿されたことがあります。不慣れな外国暮らしのなかで何くれとなくお世話下さったのは国際渉外担当のミーケ・アイゼルマンズさんです（写真3：右から筆者，ローヤーン博士，ミーケさん，クロースターマン所長）。

研究テーマはマルクスとエンゲルスが創建した唯物論的歴史観の形成と影響の歴史に関係するものでしたが、この歴史観が彼らの初期の段階でまとめられた著作である『共産党宣言』の出版史関連の史料調査にもっぱら従事しました。絞り込みにあたっては、研究所でのアドバイスとあわせて、ちょうど昨年が『宣言』の刊行150周年という節目の年に当たっていたことに大きく影響されました。とりわけ、通常は許可の下りにくい原刊本の披見や複写・写真撮影などに関わる種々の便宜が、アムステルダム大学図書館はじめその他の研究施設からも比較的容易に得られたことは大変幸運でした。また、『資本論』とならぶマルクスの代表作であるにもかかわらず、日本では、戦前、関われば死をもまぬかれかねない「国禁の書」でしたし、戦後は「冷戦」に災いされてか、同書を対象とした学術研究は皆無に等しく、最近まで翻訳の底本の確定さえままならなかったといった事情も頭の隅にありました。

『宣言』は、初版の出た1848年2月以降の70年間に限定しても、550種以上もの出版が行われています。IISGで所蔵する150種の刊本のうち、40種余りの稀観諸刊本を実検し、本文の校合等を行うことができました。なかでも23ページからなる初版本2冊—現在のところ第3刷、第4刷とみなされている—の調査には大変緊張させられました。同じものが20年近く前のサザビーズで600万円ほどでせり落とされており、一週間もそれら二つを前にしているのは万が一の紛失などを考えるとあまり精神衛生によいものではありません。『宣言』初版は直接には「ロンドン共産主義労働者教育協会」という労働者サークルから発行されましたから、その会議録の調査も欠かせません。残念ながら当時の正本は現在失われたままで、これまでの研究は今世紀初めに無政府主義の研究者マクス・ネットラウが抜粋・筆写し、後に一部公表した資料にもとづいています。その筆写ノートはIISGにあり、公表資料との異同の点検を楽しみの一つにしていたところ、大半がガーベルスベルガー式の速記文字で書かれており、その解読が容易でないのには閉口しました。帰宅して愚痴をこぼすと、「アンネ・フランクの家」を見てきた子どもたちからアンネのように速記を勉強し始めればと一本とられました。

アムステルダム到着当初は長野オリンピックでのオランダ・アイス・スケート陣の活躍による興奮まだ冷めやらぬ頃で、日本からというと必ずこの話になりました。また、時の首相と同じ姓であったおかげで初対面での自己紹介は大変たやすく済みました。あいにく1998年は今世紀でもっとも降水量が多く平年の6割増、例年なら一番よい季節のはずの6月だけで平年の半分の雨量を記録し、傘をささないオランダ人もさすがに昨年は傘をもとめたようです。普段なぜ傘をささないのか尋ねると、彼らが異口同音に発するのは修理店のない物は使わないという理由で、質実な国民性がうかがえます。「世界は神が創り賜うたが、オランダはオランダ人が造った」という言葉どおり、国土のほぼ6分の1を占める海面下の土地は干拓されたもので、このためオランダには運河が縦横に走っています。それにしてもどの運河を見ても柵がありま

せん。水の事故を心配すると、オランダ人は小学校の2～3年までで全員が泳げるようになる、泳げない子には家庭教師をつけ必ず泳げるようにする、その費用はすべて国がもつとのことでした。それぐらいかけても運河すべてに柵をつくるよりははるかに安いというのですから、その経済合理性には驚嘆してしまいました。

10ヶ月はまたたく間に過ぎ、遺憾ながら果たせなかった課題もいくつかありますので、再来年には短期間でも2001年オランダの旅をと念じているところです。」

その年の秋に、『資本論』手稿の研究で著名な大谷慎之介先生が新『メガ』の編集会議でアムステルダム社会史国際研究所にいらっしゃって、2階の港の見える食堂で昼食を共にする機会がありました。研究や新『メガ』の四方山話をする中で、旧東欧諸国崩壊後、新『メガ』は学術化を徹底させること、国際化を行うことの2本柱で編集を刷新する。国際化ということでは、以前は東独のベルリンとモスクワの2つのマルクス・レーニン主義研究所が編集の中心だったが、今はこの社会史国際研究所に事務局が置かれており、オランダをはじめ欧米各国の研究者も編集に加わっている。日本人研究者も編集に加わるようになった。ついては、橋本さんも編集に参加してくれないかという依頼がありました。その時のお話では、『資本論』第1巻草稿執筆時のマルクスの経済学抜粋ノートと、マルクスが晩年に作成した世界史年表の編集でした。巻数はそれぞれ2巻で、前者は経済学史学会の西南部会のマルクス研究に関心のあるメンバーのグループと東京や北海道のメンバーで、後者は神奈川大学の的場昭弘さんたちのグループの予定だったようですが、その後、世界史年表は、私も留学時にゴータやエルフルト、アイゼナッハを後藤洋先生と見て回る際に大変お世話になった旧東独の研究者アイケ・コップフさんがお一人で担当されることになりましたし、前者はグループの編成替えや世代交代があったようです²⁴。大谷先生からの編集参加の依頼に対して、私はすでに留学して春頃までには『宣言』を研究する決心を固めて済みまして、今後10年は『宣言』をやるということで、ご依頼にお応えすることができませんでした。10年後に『宣言』の研究がまとまって、まだ新『メガ』の編集をお手伝いできるようなことがあれば、応分の協力はしたいとも申し上げました。

こうして、『共産党宣言』の普及史・受容史研究が始まったわけです。

その後の経緯は、拙著『普及史序説』「あとがき」(401～402ページ)から引用します。

「本書を構成する章の多くは、1998年3月から翌1999年1月にかけて10ヵ月間にわたりアムステルダム社会史国際研究所に文部省在外研究員として滞在する機会に恵まれたことが発端と

²⁴ これまで私は新『メガ』の読者といいますが、利用者の立場ですので、その編集についての最新事情はよく分からないのですが、「日本編集委員会の代表も、現在は平子友長さん（一橋大学名誉教授）に引き継がれ、[……] IV/17, 18, 19（第IV部門第17, 18, 19巻）の編集も、大東文化大学の竹永進さんから、現在は若手メンバーに代わって作業が進んでいる」（早坂啓造「『資本論』草稿（メガ）研究と人類的な価値」『経済』第260号、新日本出版社、2017年5月、25ページ上段）とのことです。なお、第IV部門第14巻は、1850年代末の『経済学批判要綱』と同時期の恐慌論ノート等を含む巻ですが、守 健二 東北大学教授、大村 泉 東北大学名誉教授、玉岡 敦 [中国西安] 陝西師範大学外国語学院講師の日本人研究者3氏が中心となり、ロルフ・ヘッカー氏とともに編集したもので、私の手許には昨年（2017年）5月末日に届きました。

なり、その後、2003年度から2006年度および2009年度から2012年度といずれも4年間にわたる科学研究費補助金の交付を得て成ったものである。科研費を得られたのは大変幸運なことであった。この間、前者の科学研究費助成事業の研究成果報告書に所要の加除を施し、学位論文として提出、2007年10月に東北大学から博士（経済学）が授与された。

いまだ不十分な内容ではあるが、本書の第1部によって、『共産党宣言』初版23ページ本についてのわが国の研究は、その国際的な水準を理解できるところにまでなんとかようやく辿り着くこととなったのではなかろうか。また、わが国の『宣言』の普及史研究も、その概説は大村泉・窪俊一両氏との共著論文²⁵で果されたとはいえ、その立ち入った研究は、『宣言』最初の英訳、そして多くの刊本の底本となった1872年ドイツ語版についての考察等、本書の第2部によって、ようやく緒に就くこととなったのではなかろうか。したがって、本書は『宣言』普及史研究のあくまでも序説でしかない。もとより筆者も今後とも微力を尽くすつもりではあるものの、同学の、とりわけ若い研究者の方々が序説の誤りを補正してくださると共に、続く本論部分を書き継いでいってくださるならば、これにまさる喜びはない。」

すでに『宣言』関係の論文も3本ありましたから、比較的たやすく科研費も当たったようで、本当に幸運でした。また、論文博士の学位も取れたことは文字通り望外でした。

一昨年、本を出したことで、なんとかわが国の学界にもある程度の貢献はできたものと思っています。

Ⅲ 今後の研究の課題

最後に、退職後の研究について簡単にお話しして終わりにします。

1. 『共産党宣言』普及史研究の今後の課題

(1) 日本の普及史の継承

まず、『共産党宣言』普及史研究の継続ですが、日本への普及史の分野は、『宣言』のみならず、マルクス主義全般にわたり、東アジアへの普及史も含め、すでに拙著の最終章でもご紹介した玉岡敦さんや久保誠二郎さんに関心をもっていただけで、順調に進んでいるように見受けられ、大変嬉しく思っております。

(2) 欧米諸版本の研究

1) アメリカの大学等所蔵の初版23ページ本の実検

初版23ページ本はオリジナルを13点実検する機会に恵まれたのですが、アメリカにある刊本はまだ実検できておりません。体調の方が長距離の空路はもう許さないような状況ですが、万一多少と

²⁵ 大村泉・窪俊一・橋本直樹「『共産党宣言』普及史研究の到達点と課題」(1)および(2) [(1):『経済』第130号, 新日本出版社, 2006年7月, 101~118ページ, (2):『経済』第131号, 新日本出版社, 2006年8月, 160~177ページ]。

も回復した折にはそうした作業が出来ればとひたすら幸運を願っているような具合です。

2) 主な各国語訳の検討 1888年英語版, フランス語版等

『宣言』については, 1888年英語版やフランス語版の検討にまだ未着手ですので, こうした検討が今後必要であろうと思っております。

3) 検閲抑圧体制の詳細, ことに法律の検討

これまでの研究の補足としては, 時々の『宣言』の出版や労働者政党・団体の諸活動への各国当局の抑圧・弾圧体制がどのようなものであったのかについての研究も, 特に法律ですね, 必要であろうと考えているところです。これは経済学ではありませんので, 私にとっては基礎的素養も欠けており, 荷が勝ち過ぎてなかなか難しい課題です。

2. 研究全般

『宣言』を離れて, 研究全般に関して申しますと, 初期マルクスの疎外論関係の論文が本1冊出せるくらいたまっていますので, それをまとめたいと考えています。出典表記に新『メガ』を加えたり, 私の手許には旧臘18日に届きました『ドイツ・イデオロギー』所収巻I/5の検討²⁶など, 少なくとも2~3年かけなければならないようですから, 多少時間はかかるでしょうが。

また, 1850年代全体のマルクスおよびエンゲルスの諸活動も追いかけてみたいと思っております。残された時間との相談で, まあ時間が許せばというところですね。

以上で, 私の『共産党宣言』研究の経緯と課題についてのお話は終わりです²⁷。ご多忙の折, たくさんの方々にお集まりいただきまして大変恐縮しております。

ご清聴, どうもありがとうございます。

²⁶ 特に「フォイエエルバッハ」章については, 福島大学の修士課程に在籍していた折, 指導教官だったウェーバーのご翻訳などもある松井秀親先生にドイツ語で読んでいただいたことや, 東北大学大学院では, 服部先生の学部演習に出席して, また細谷昂先生が主催されていたゼミで『経済学批判要綱』に引き続いて, それぞれ読んでいただいたこと, さらに服部先生監訳の準備作業として渋谷正・後藤洋両鹿児島大学名誉教授と隔週で土曜日の午後を使い種々検討したこと等が, 懐かしく思い出されます。

²⁷ 退職後の業績を下記しておきます。

- 1) (論説) 「『共産党宣言』という表題にした理由」『経済』第272号, 新日本出版社, 2018年5月, 140~148ページ。
- 2) (招待報告) 「『共産党宣言』在日本的翻訳と影響」马克思主义在东亚: 概念・文本・实践——纪念马克思诞辰200周年暨《共産党宣言》问世170周年学术研讨会 (南京大学 政府管理学院125室), 2018年5月5日。
- 3) (招待報告) 「『慶應図書館所蔵の『共産党宣言』初版について』マルクス生誕200周年記念コンファレンス「マルクス—過去と現在」(慶應義塾経済学会主催, 慶應義塾大学三田キャンパス大学院棟1 F313教室), 2018年9月6日。
- 4) (事典項目) ①「共産主義」, ②「私有財産制批判」, 社会思想史学会編『社会思想史事典』丸善出版, 2019年1月, 332/333ページ, 334/335ページ。